

## 現代短歌の中の地球科学

### ～変成岩編～

お、<sup>サアベンティン</sup>蛇紋岩のそばみちに  
そらは薄明のつめたきひとみ  
宮沢賢治

平たきは神居古潭石ゴースキーに似て  
立つ石は魚野川石  
宮 柊二「忘瓦亭の歌」

蛇紋岩を広辞苑でひくと「主として蛇紋石からなる超塩基性の岩石でかんらん岩などから生じた変成岩。黒または暗緑色。模様があって美しく室内装飾に用いられる」と書かれています。マントル物質に最も近いと考えられているかんらん岩が、広域変成作用などによって水と反応して蛇紋岩は生成されます。断裂帯や沈み込み帯などプレートの境界部に大量に出現するという特徴があります。

若い宮沢賢治は岩手県の山を歩いて鉱物集めに熱中していました。ここに紹介した短歌は北上山地を旅した時に作られた連作で、北上川第一夜から第四夜までであるうちの、北上川第四夜という一連のなかにあります。どこでみた蛇紋岩の露頭なのでしょう。早池峰のほうでしょうか。第一夜には「北上川の遠き漁り火」が出てきますし、第二夜には夜「鶏頭山の赤ぞらをくもよぎり行きて夜はあけにけり」という歌が見られます。鶏頭山は早池峰連峰の西端のピークです。

宮 柊二の短歌は露頭ではなく庭石だと思えます。神居古潭石は蛇紋岩または蛇紋岩の中に取り込まれている変成岩のことでしょう。彼は庭石に興味があったようで、石の名前を読み込んだ歌をいくつか残しています。もう一方の魚野川石は筆者の勉強不足でどういふ石かわかりません。しかし、魚野川というのは谷川岳を源として作者の出身地である新潟県堀之内を流れ、越後川口で信濃川に入る川を指すのでしょう。故郷を離れて東京で暮らしていた作者は、庭石として故郷の石を置いていたの

だと思います。一般に石の命名には、学術的なもの、または石材として流通しているものについては暗黙のルールがあるようですが、庭石として売られているものにはほとんどないようです。

青春は一刻にして永遠と思ふ大理石の  
皮膚老ゆるを知らず  
春日井建「未青年」

大理石は、石灰石が再結晶作用を受けてほとんど方解石の結晶のみからなる緻密な岩石で、均質で大きい塊が得やすく、美しく加工しやすいため古くから石材に利用されてきました。商業的には装飾や工芸品、美術品用に使用される石灰質岩石および類似の岩石の総称になっています。名前は中国雲南省大理県産の美しい石灰岩に由来します。これは作者が20代のときに作られた短歌です。大理石のすべすべした質感が永遠の青春を思い起こしたのでしょう。

オクラホマ州イタコルミイの産と聞く  
こんにやく石はくにやくにやまがる  
真鍋正男「雲に紛れず」

こんにやく石は細長く板状に切った石の両端を持ち上げると曲がり、力を抜くと元に戻る性質があります。主に小さな石英粒からなる雲母石英砂岩質片岩ですが、曲がる機構は必ずしも明らかではありません。この短歌は、作者が実際に博物館かどこかでこんにやく石を見た驚きを歌にしたと思われる。

展示はされていませんが、こんにやく石は地質標本館でも所蔵しています。くにやくにゃ、という感じではありませんが不思議な石があるものです。

作者紹介  
宮沢賢治：明治29年岩手県生まれ、昭和8年没。  
宮 柊二：大正元年新潟県生まれ、昭和61年没。  
春日井健：昭和13年愛知県生まれ。  
真鍋正男：昭和23年香川県生まれ。

森尻理恵(産総研 地球科学情報研究部門 地球物理情報研究グループ)